

麦作技術情報 No. 3

令和3年3月18日
鳥取県産米改良協会

令和3年産(令和2年播種)麦の現時点の出穂期予測日は4月3日ではほぼ平年並(11月6日播種「しゅんれい」)であるが、今後の高温で早まる可能性があるため、適期を逃さないよう病虫害防除等の管理を確実にすることが重要である。

■病虫害防除

- ・ほ場ごとに出穂期に応じて適期防除を行う。
- ・赤かび病は、収量や品質が低下するばかりでなく、人や家畜に有毒なかび毒を発生するため、予防防除を徹底し、発生させないよう努める。
- ・高温になっていることから、網斑病に注意し、発生を見たら、適期防除に努める。

■排水対策

- ・湿害は出穂後の登熟に悪影響を及ぼす。特に登熟に大きな役割を果たす麦の細根の発達を阻害し、登熟不良の原因となる。
- ・排水路の点検等を定期的に行い(明渠と排水溝をつなぎ、速やかに排水されるようにする)土壌が乾きやすく湿害を受けない環境を作ることが重要である。

【現在までの気象経過】

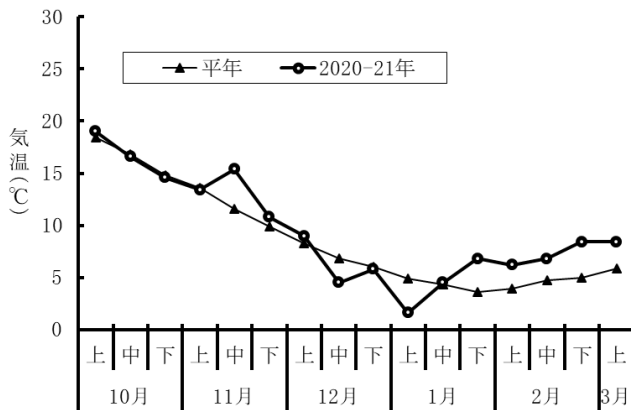


図1 2020-21年日平均気温(倉吉市)

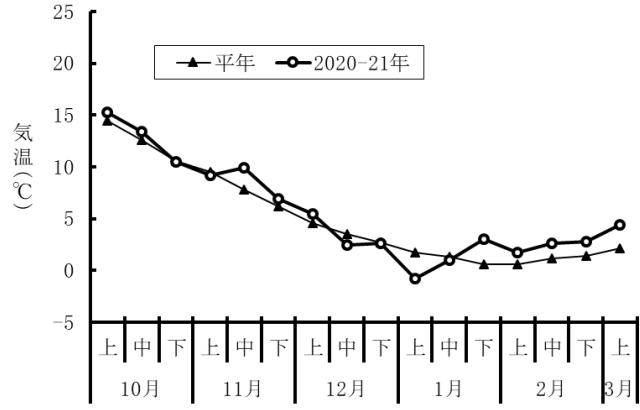


図2 2020-21年日最低気温(倉吉市)

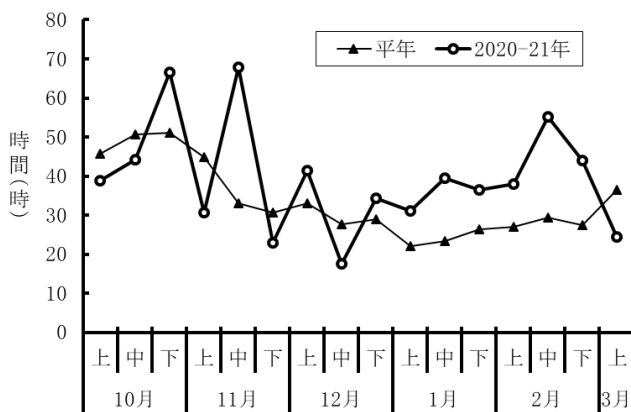


図3 2020-21年旬別日照時間(倉吉市)

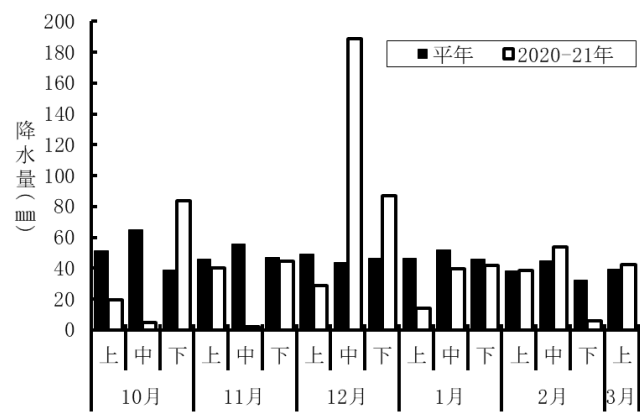


図4 2020-21年旬別降水量(倉吉市)

12月上旬までは平年並～高めの気温で推移、12月中旬から1月中旬は平年並～低めの気温で推移し平年に比べ降雪量が多かった。1月下旬以降は高めの気温で推移している。11月から3月上旬までの平均気温は平年比1℃高く、日照時間は平年比124%、降水量は平年比107%となっている。

I 気象予報

中国地方 1か月予報 (3月20日から4月19日までの天候見通し)

令和3年3月18日
広島地方気象台発表

<特に注意を要する事項>

期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

<予想される向こう1か月の天候>

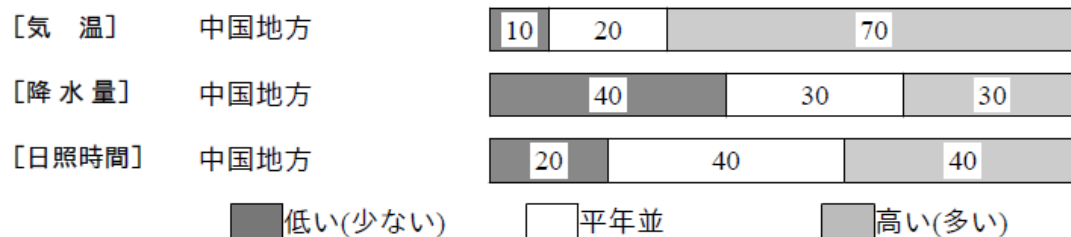
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

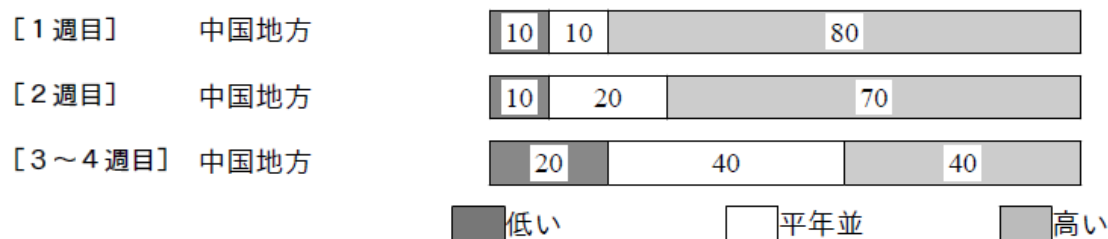
向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率70%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >



<気温経過の各階級の確率 (%) >



<予報の対象期間>

1か月 : 3月20日(土)～4月19日(月)
1週目 : 3月20日(土)～3月26日(金)
2週目 : 3月27日(土)～4月2日(金)
3～4週目 : 4月3日(土)～4月16日(金)

II 「しゅんれい」(二条大麦)の生育概況

【現地ほ場】

- ・倉吉市「しゅんれい」の3月3日現在の調査結果は、10月29日播種ほ場で茎数 676 本/m²、草丈 44.2cm、葉色 38.8、葉齢 10.4(止葉抽出)、11月16日播種ほ場で茎数 892 本/m²、草丈 31.3cm、葉色 30.7、葉齢 9.5、幼穂長 8mm で生育は概ね平年並である。
- ・特記すべき病害虫の発生は見られていない。
- ・2回目の穂肥は、主に3月1～2週目に施用されている。

【農業試験場生育観測ほ場】

- ・11月6日播種「しゅんれい」においては、1月6日に幼穂形成期を迎えた。近年は暖冬傾向で12月中(過去5年平均は12月27日)に幼形期を迎えていたが、本年は年明けとなった。2月中旬に茎立期を迎え、播種4か月後(3月1日)の生育調査では、葉令進展は1葉早く、茎数は平年並(平年比 100)、草丈は低く(平年比 76)、葉色は濃く(平年比 115)推移している。

表 ビール麦「しゅんれい」の生育状況(播種後約4か月:3月上旬)

項目	平成28 年産	平成29 年産	平成30 年産	令和元 年産	令和2 年産	令和3 年産	過去平均比(差)
茎数/m ²	-	806	816	618	986	803	100
草丈cm	36.9	29.9	27.4	39.5	45.8	27.2	76
葉色SPAD	35.0	36.8	42.5	41.5	45.5	46.3	115
葉齢	9.4	8.1	8.4	9.7	10.7	9.8	(1)

- ・3月15日現在の11月6日播種「しゅんれい」の出穂期予測日は4月3日で、過去5年平均と比較すると平年並～2日遅くなっている。R2年産が極高温で推移し、大変早い出穂期となっていることが影響している。3月下旬は平年に比べて高い気温が予想されており、今後の高温で出穂期は早まる可能性がある。

表 「しゅんれい」における過去の出穂期(農試験場内11月上旬播種)

産年	出穂期 月日
28年産	4月2日
29年産	4月10日
30年産	4月8日
R元年産	3月30日
R2年産	3月21日
過去5平均	4月1日
R3年産※	4月3日(予測日)

※R3年産については、R3年3月15日時点における農試験場内調査区の葉耳間長から推測した予測日。

Ⅲ 技術対策

1 排水対策

- ・登熟期の湿害は収量や品質に悪影響を及ぼす。
- ・大麦は、充実度が悪い等の理由で等級の低下となる場合が多い。充実度が低下する要因の一つとして登熟期の湿害の影響が大きいことから、冬季に明渠等が埋まって排水を阻んでないか、排水状況を点検し、手直しを行い速やかに排水が出来る状況にする。

2 病害虫防除

(1) 網斑病

- ・気温が高くなっており葉色の濃い過繁茂ほ場では、特に注意が必要である。
- ・発生ほ場では、病気がまん延する前にチルト乳剤 25 (1,000 倍、収穫 21 日前まで、1回) 等を散布する(展着剤を加用のこと)。

(2) うどんこ病

- ・高温傾向で多発する病害で、現在のところ発生した情報は伝えられていないが、動向に注意し発生を確認した場合は防除を行う。

(3) 赤かび病

- ・赤かび粒に対する検査基準が厳しくなっており、防除を徹底する。
- ・本病は、出穂期以降の高温 (20～27℃)、降雨により発生が助長され、発生すると出荷できなくなるので、すべてのムギで防除の徹底が必要である。また、発病後の防除は困難であるので、下表のとおり適期防除を徹底する。

赤かび病防除対策

	麦種	防除時期	農薬名
1回目	二条大麦	穂揃期の10日後頃	シルバキュアフロアブル または ワークアップ粉剤DL
	六条大麦	開花を始めた時期～開花期	
	小麦	〃	
2回目	二条大麦	1回目散布の7～10日後 (多発生が予想される場合)	トップジンM水和剤 または トップジンM粉剤DL
	六条大麦	1回目散布の7～10日後	
	小麦		

使用基準(赤かび病)

農薬名	使用量	使用時期	本剤の使用回数
シルバキュアフロアブル	2,000倍	収穫14日前まで 小麦は7日前まで	2回以内
ワークアップフロアブル	2,000倍	収穫7日前まで	3回以内
ワークアップ粉剤DL	3kg/10a		
トップジンM水和剤	1,000～1,500倍	大麦: 収穫30日前まで	3回以内(出穂期以降は1回以内)
		小麦: 収穫14日前まで	3回以内(出穂期以降は2回以内)
トップジンM粉剤DL	4kg/10a	収穫14日前まで	3回以内(出穂期以降は1回以内) 小麦は出穂期以降2回以内

(注)

- ・多発生条件下では、シルバキュアフロアブル、トップジン M 水和剤、トップジン M ゴルおよびワークアップフロアブルの防除効果が高い。
- ・水和剤の散布に当たっては、展着剤を加用する。
- ・大麦ではチオファネートメチル剤(トップジンM水和剤、同ゴル、同粉剤等)の使用回数は出穂期以降1回以内となっているので注意する。

○農作業事故防止を徹底しましょう！
3月1日～5月31日まで春の農作業安全運動期間です。



大切なものを失う前に！

STOP! 農作業事故

普段は大丈夫でも油断や疲れにより突然、事故は起こります。
慣れているいつもの作業でも安全には十分に配慮してください。

10万人当たりの死亡事故件数

交通事故や建設事故より多い！

10万人当たりの死亡事故件数では、建設業、全産業、交通事故が減少傾向で推移する中、農業は増加傾向を示しており、死亡リスクが最も高くなっています。

死亡 リスク	建設業の 2.6倍	交通事故の 5.6倍	全産業の 11.1倍
-----------	--------------	---------------	---------------

■10万人あたりの死亡事故発生人数の推移



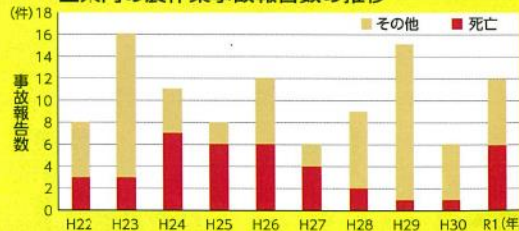
農作業事故件数(鳥取県内)

注意一秒ケガー生、 少しの油断が事故を招く！

60歳以上が
84%

県内でも毎年農作業事故が発生しています。被害者の多くは、農業の中心的な担い手となっている60歳以上の高齢者に集中しています。

■県内の農作業事故報告数の推移



農作業事故ゼロを目指して 鳥取県農作業安全・農機具盗難防止協議会(農安協)

お問い合わせ

鳥取県農林水産部とっとり農業戦略課
JA鳥取県中央会農業くらし対策部

TEL.0857-26-7327
TEL.0857-21-2607

トラクター運転は、安全をチェックして 交通ルールを遵守しよう!



安全のポイント

農業機械作業による事故の中で最も多いのが乗用型トラクターによるもの。その原因の6割は転倒や転落によるものです。

①ほ場進入路の幅・勾配の改良も

トラクター事故で最も多い転落転倒は、ほ場出入り時に起こっています。

進入路の高低差が大きい

進入路の高低差が小さい



危険性の高い進入路と、道路計画を見直し危険性を改善した進入路の例

②安全キャブ・フレームを活用

安全キャブ・フレーム装備の場合、シートベルトの着用はセットで行うことで安全が向上。



③低速車マークや 反射板(シール)を活用

自動車から見にくいため、道路上で追突される事故が起こっています。



④ほ場作業が終わったら ブレーキ連結

ブレーキ連結は、ほ場を出てからではなく、出る前に行います。



⑤危険箇所のチェック

移動道路やほ場の危険箇所を確認し、地図で見える化し、共有して改善しましょう。



新しい交通ルール

農作業機を装着した農耕トラクターの公道走行が可能になりました。

ただし、大型特殊免許※が必要な場合があります。

※幅1.7m、長さ4.7m、高さ2.0mを超える場合。
または幅が1.7m以下でも最高速度が15kmを超える場合。

